

心下痞心下痞硬を問う

臨床 § 症候

峯 尚志



1

心下痞、心下痞硬を問う

峯クリニック 峯 尚志

はじめに

- 症候を問うというシリーズでは、腹満や胸苦しさといった、ある種とらえどころのない症候を優先的に取り上げてきました。
- これらの症候は西洋医学的な検査においては、異常なしと扱われることも多く、器質的な異常に至る前の機能的な異常のことも多いわけです。
- 4月、5月はより腹痛、胸痛というように、器質的異常の割合もおおくなり、西洋医学的な捉え方がより重要な病症を学んでいきますが、形になる前の症状をいかにとらえるかが、未病を重視する東洋医学では大切になってきます。
- 今回は心下の痞えというとらえどころのない自覚的な訴えから心下痞硬という自他覚症状に至る道筋の病態と治療を学んでいきたいと思います。

腹診用語

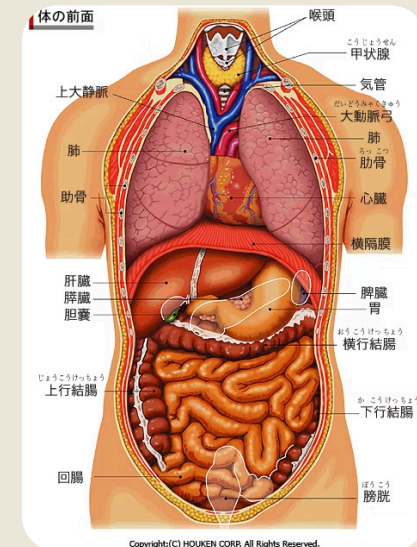
- 心下痞
- 心下痞硬
- 胃内停水
- 胸脇苦満
- 心下満微結
- 心下支結
- 腹皮拘急
- 小腹不仁
- 正中芯
- 臍傍圧痛
- 小腹急結
- 回盲部の圧痛、抵抗
- 心下悸、臍上悸、臍下悸
- 腹満
- 蠕動不穩
- 心下満
- 心下痞堅
- 結胸

心下痞、心下痞硬とは

- 心下痞
心下部の自覚的な不快感、痞え感、苦しさ
- 心下痞硬
心下部の他覚的な抵抗

心下にあるもの

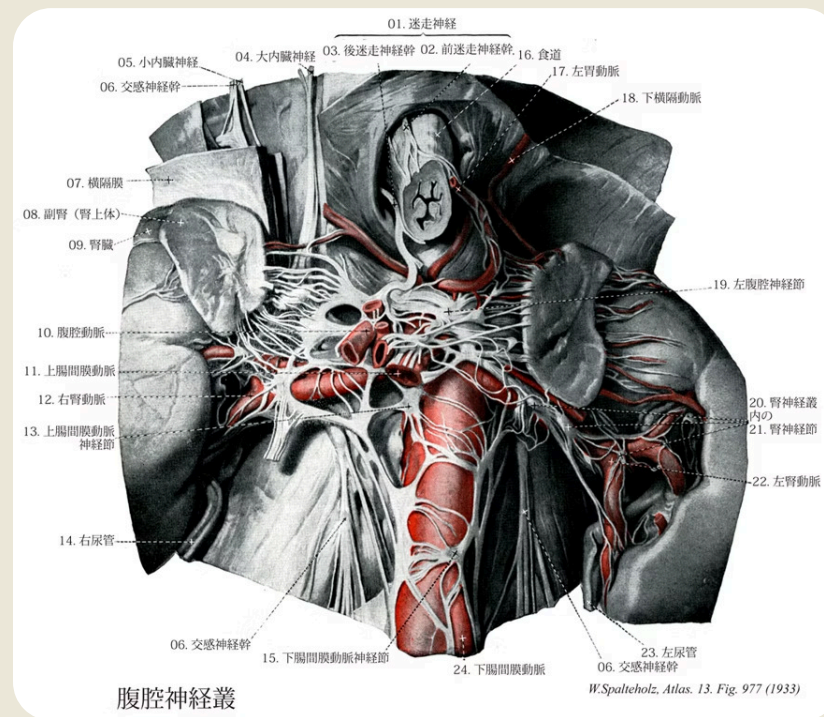
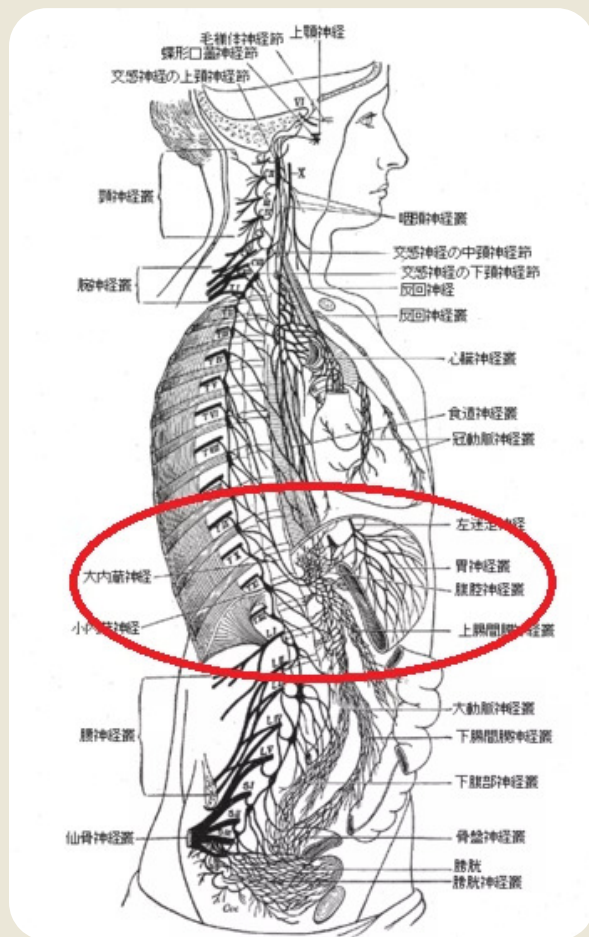
- 横隔膜
- 下部肋骨
- 腹壁、腹部の筋肉、筋膜
- 食道、胃、十二指腸
- 大腸（横行結腸）
- 小腸
- 大動脈、腹腔動脈、下大静脈
- 脾臓
- 肝臓、胆嚢
- 脊椎



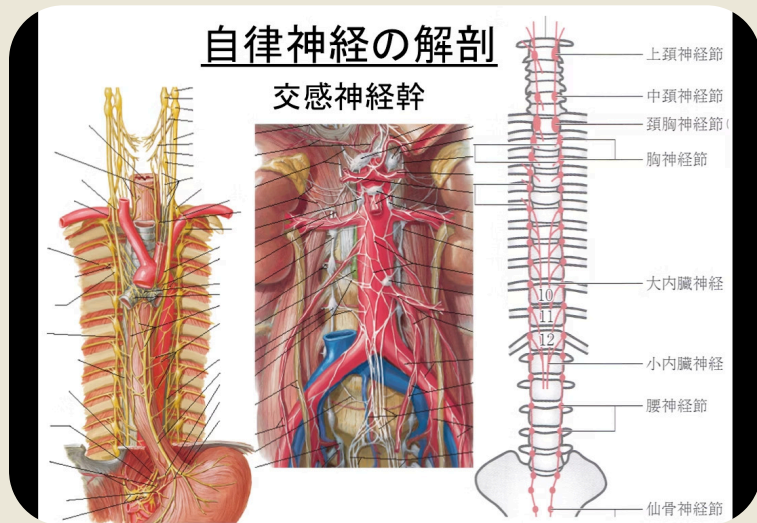
臓腑の奥にあるのが心下にあるものをつなぐ腹腔神経叢

腹腔神経叢

- 腹腔動脈周囲の自律神経叢。
- 左右の腹腔神経節（太陽神経節）とこれを結ぶ神経網からなる。大・小内臓神経（交感神経）や迷走神経（副交感神経）の線維を受け、胃・肝・膵・脾・腎臓などに線維を送る。膵癌などで激痛がある場合、交感神経に含まれる感覚線維を遮断する目的で腹腔神経叢ブロックを行うことがある。
- 腹腔神経叢は腹腔動脈、さらにすぐにその下側からでる上腸間膜動脈の基部周辺を囲む極めて強大なもので、大きな腹腔神経節をもち、全体の形から太陽神経叢ともよばれる
- 大、小内臓神経は横隔膜を貫いて腹腔内に入り、腹腔動脈周辺で強大な腹腔神経叢を作っている。この神経叢は下行してくる迷走神経(副交感繊維)の分枝をも受け、ここから出る枝は血管(動脈)壁にそって上、下腸間膜動脈神経叢、腎神経叢、肝神経叢、胃神経叢、膵神経叢、脾神経叢などを形成して腎、腎上体、肝臓、胃、腸管、膵臓、脾臓など腹腔内諸器官に分布する



腹部交感神経幹



- 腹部交感神経幹も4～5対の腰神経節をもち、腹部大動脈とその血管枝の壁に多くの枝をだしている(腹大動脈神経叢)。



参考：腹腔神経叢ブロック

腹腔神経叢の機能的異常によって心下痞が生じるが痞えの極まりは痛みであり、腹腔神経叢の位置的オリエンテーションの理解のために腹腔神経ブロックについて述べる。

上腹部に生じるがん性疼痛などの腹部内臓痛に対して腹腔神経叢ブロック、内蔵神経ブロックの適応があり薬物療法よりも鎮痛効果が高く、くも膜下ブロックなどと異なり、感覚、運動障害を生じないという利点がある。早期に施行するほど鎮痛効果が高い

腹腔神経節ブロックの後方アプローチ

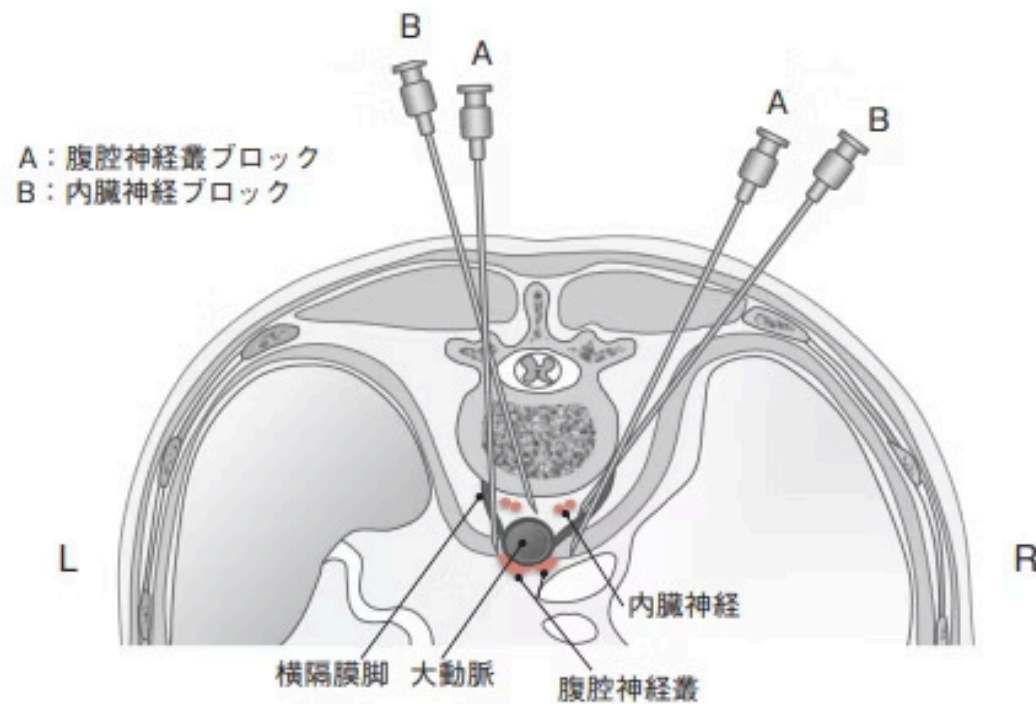


図1 腹腔神経叢ブロック，内臓神経ブロック

腹腔神経叢ブロックの前方アプローチ

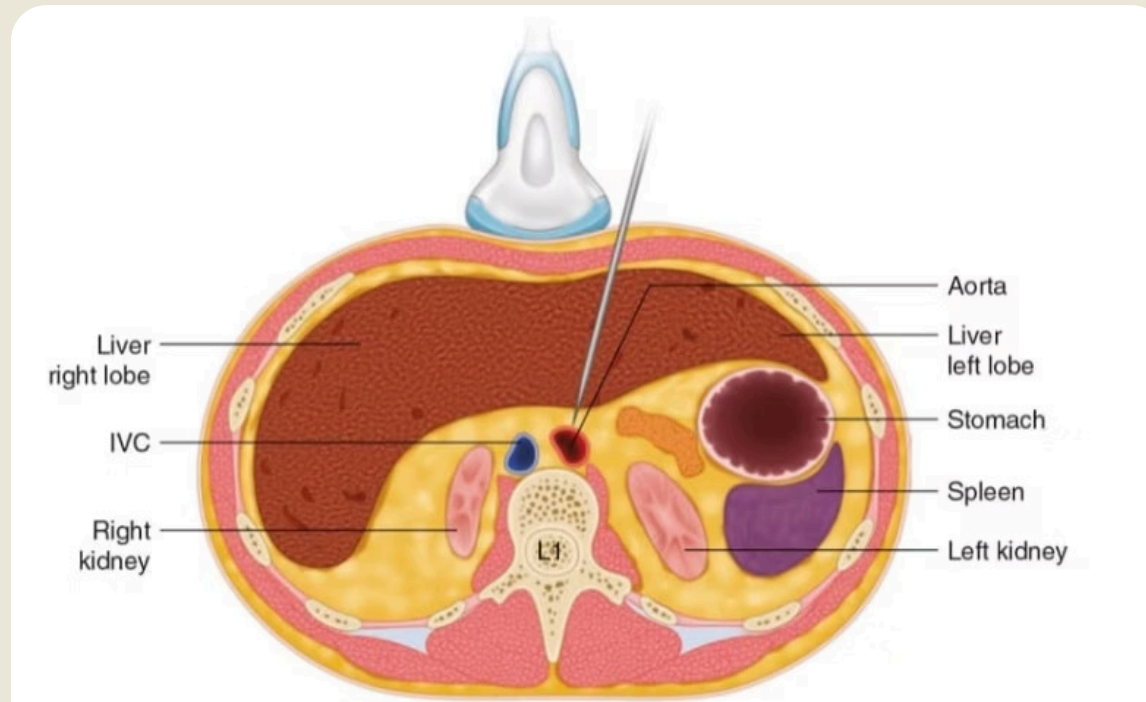


図 9 腹腔神経叢ブロックを行うための US トランスデューサと針の位置を示す短軸図。

(許可を得て転載、Cleveland Clinic Center for Medical Art & Photography© 2010. All rights reserved)

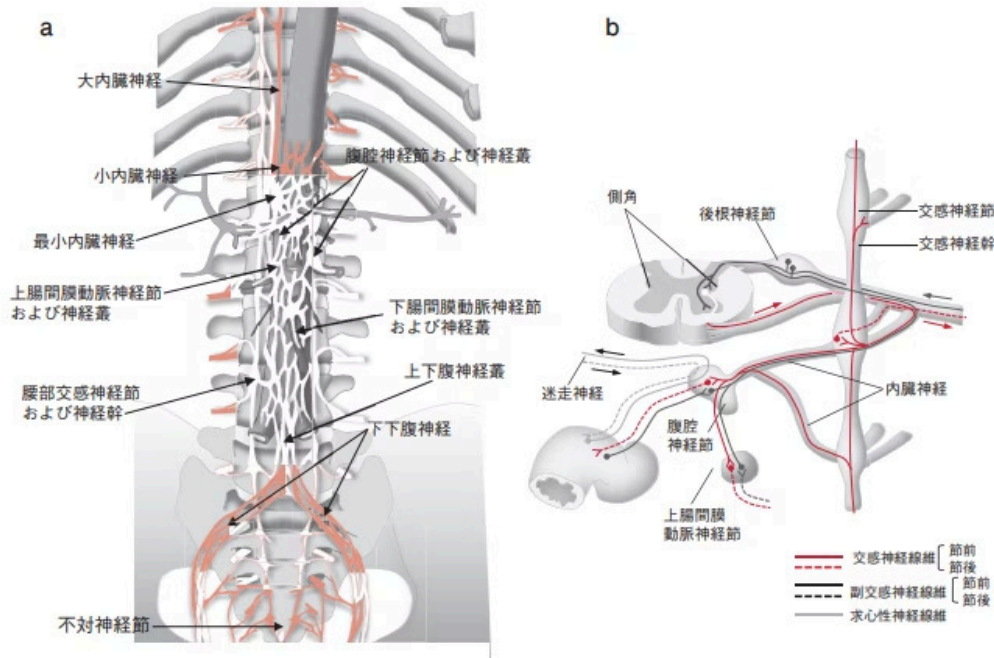


図2 腹腔および骨盤腔内の神経走行

上腹部内臓からの求心性線維は、腹腔神経叢内にある腹腔神経節に入り、内臓神経（大、小、最下内臓神経）、交感神経幹、白交通枝を通過して後根に入り、脊髓後角に至り、さらに脊髓前側索を上行する（図2a,b）。腹腔神経節には、上腹部臓器、すなわち胃、肝臓、胆嚢、膵臓、脾臓、腎臓などの線維が入る。

本法は、これらの上部内臓からの求心性線維を遮断することにより鎮痛効果を発揮する。

腹腔神経叢の構造的理解

腹腔神経叢に網の目状に張り巡らされる迷走神経と椎骨の両側に縦列する幹の様に太い交感神経幹が陰陽の対をなし、臓腑機能の緊張と弛緩のバランスを取っている。

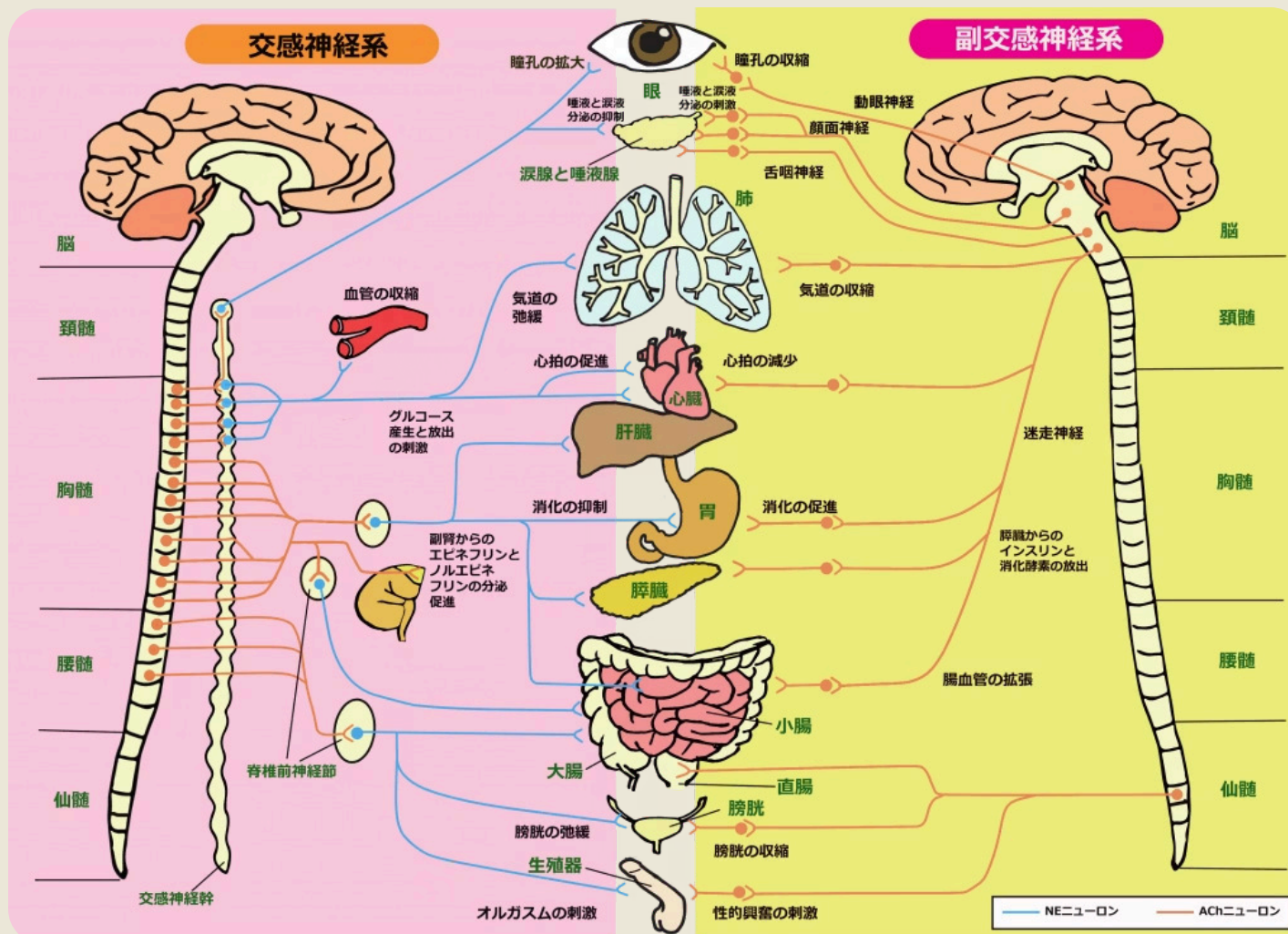
自律神経系の過活動とは

交感神経

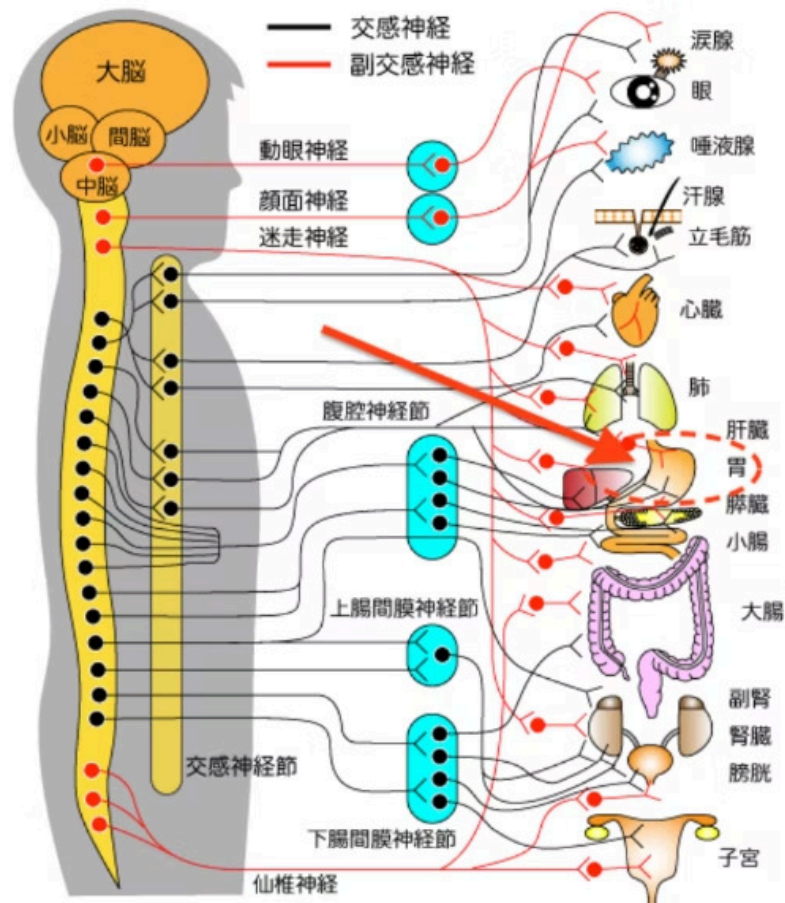
心拍、血圧の上昇、肩こり、不眠症、頭痛、胃腸障害
呼吸の速まり、筋緊張の亢進

副交感神経

心拍、血圧低下、頭痛、だるい、眠い、活動の低下
めまい、うつ、痛みの閾値低下
腸蠕動亢進、膀胱の過敏性増加（過活動膀胱）
気管支の収縮
身体を休ませる状態、リラックス



●自律神経（交感神経と副交感神経）



心下の痞えは腹腔神経叢に存在する交感神経、副交感神経の陰陽の乱れによって生ずる 傷寒論、金匱要略にみる心下痞、心下痞硬の記載のある処方

心下痞の処方

- 大黃黃連瀉心湯
- 附子瀉心湯
- 五苓散
- 大承氣湯

心下痞硬の処方

- 桂枝人參湯
- 半夏瀉心湯
- 甘草瀉心湯 心下痞硬而滿
- 生姜瀉心湯
- 十棗湯 心下痞硬滿

心下のその他の腹証

- 心下急 心中痞硬 大柴胡湯
- 心下痞堅 木防己湯
- 心下支結 柴胡桂枝湯
- 胸脇滿微結 柴胡桂枝乾姜湯
- 結胸 大小陷胸湯、柴陷湯
- 胸中痞硬 瓜蒂散

心下の痞えを、寒熱、食滯、水滯、痰飲、気逆から考える

寒	人参湯 桂枝人参湯
熱	大黃黃連湯心湯、三黃湯心湯
寒熱錯雜	附子湯心湯、半夏湯心湯、生姜湯心湯、甘草湯心湯
食滯	平胃散
水滯	五苓散
痰飲	二陳湯
氣滯、氣逆	茯苓飲

寒

人参湯

《傷寒論》《金匱要略》

人参、甘草、乾姜、朮

- 「霍乱、頭痛み、発熱し、身は疼痛し、熱多く水を飲まんと欲するものは、五苓散これを主る。寒多く水を用いざるものは、理中丸これを主る。」
- 「胸痺、**心中痞気**し、気は再び胸に在り、胸満し、脇下より心に逆搶するは枳実薤白白酒湯これを主る、人参湯またこれを主る」
- 効能：温中散寒、補気健脾、温養摂血
- 主治：中焦虚寒、寒邪直中、陽虚不摂血

桂枝人参湯

桂枝、甘草、乾姜、人参、白朮

- 「太陽病、未だ外証除かれずして、しばしば之れを下し、遂に**協熱して利し**、未だ之れを止まず、心下痞鞭して表裏解せざるものは桂枝人参湯之を主る」
- 効能：温裏解表、益気消痞

人参をいかに活かすか

基原) ウコギ科のオタネニンジン(人参)の根

性味) 甘、微苦、微温 帰経) 肺、脾

効能)

- 補気固脱→独参湯
- 補脾気→四君子湯
元気がない、疲れやすい、四肢無力、食欲低下、泥状～水様便
- 補肺気→補肺湯、麦門冬湯
呼吸困難、咳嗽、息切れ
- 生津止渴→白虎加人参湯、麦門冬湯、生脈散
高熱で津液を奪われ口渴、多汗、多汗、元気がない、脈大
- 安神益智→帰脾湯、安心定志丸
気血不足による心身不安の不眠、動悸、健忘、不安感

人参の薬理

- 消化吸収、新陳代謝を高めて食欲を増進し、蛋白合成を促進する
脂質代謝を改善する
- 神経の賦活作用
人をして忘れさせず 作業能力の増加、疲労の軽減
大脳の抑制にも一定の効果あり、安神定志の効果もある。
- 下垂体－副腎系の興奮
強壮作用、外界からのストレスにたいする抵抗力を高める
- 性機能の増強
性腺刺激ホルモン様作用
- 強心 心臓の収縮力を高める、心筋の代謝能力を改善
- 血糖降下
- 抗利尿 アルドステロンの分泌亢進
- 抗アナフィラキシー作用

瀉心とは何か

- みぞおち（心下）の痞えをとる
- こころの痞えをとる。

黄連、黄芩を君薬とする処方群であり心下中焦脾胃の実邪を瀉する

瀉心とは「心下の痞え感を去る」という意味

瀉心は心にこもった熱をとる

精神的な興奮や緊張を瀉する

瀉心湯類

- 大黃黄連瀉心湯
- 三黄瀉心湯
- 附子瀉心湯
- 半夏瀉心湯
- 生姜瀉心湯
- 甘草瀉心湯

瀉心湯類に用いられる五つの生薬黄連、大黃、黄芩、山梔子、黄柏について解説する
いずれも黄色い色をした生薬で清熱瀉火の作用を持つ

黄連

基原) キンポウゲ科のオウレンの根茎

性味) 苦、寒

帰経) 心、脾、胃、肝、胆、大腸

薬能) 清熱燥湿、清熱瀉火、清熱解毒

応用) 胃腸湿熱の嘔吐下痢、**心火の不眠、イライラ**、肝胆火昇の目赤腫痛、胃熱の消穀善飢、血熱妄行の口内炎の要薬である

薬理) 黄連は幅広い**抗菌作用**を持ち、感染性下痢に有効

主成分は抗菌作用、胃液分泌作用、止瀉作用を持つ**ベルベリン**

その他、微量のパルマチン、コプチシン、オーレニンなどの苦味アルカロイドを3~7%含む

苦みの成分が、舌の味覚神経を刺激して唾液や胃の分泌をうながし、消化を助ける



大黃

基原) タデ科のダイオウ属植物の根茎

性味) 苦、寒

帰経) 脾、胃、大腸、肝、心包

薬能)

瀉熱通暢→大承気湯

清熱瀉火、涼血解毒→三黄瀉心湯

行瘀破積→通導散、治打撲一方

清化湿熱→茵陳蒿湯、大陷胸湯

陽明腑実証の要薬、腹部に溜まった熱毒を瀉すとともに、駆瘀血作用、抗菌作用、抗炎症作用、鎮静作用を持つ。



黄芩

基原) シソ科のコガネバナの周皮を除いた根

性味) 苦、寒

帰経) 肺、大腸、小腸、脾、胆

薬能)

清熱燥湿→半夏瀉心湯、黄芩湯

清熱瀉火、解毒、涼血→清肺湯、黄連解毒湯

清熱安胎→当帰散（当帰、芍薬、川芎、黄芩、白朮）

主成分：フラボノイド（バイカルイン、オウゴニン）など

バイカルインに解熱作用、利胆作用、抗ウイルス作用、抗アレルギー作用、抗炎症作用など

黄芩はとりわけ、肺、大腸、胆道系の湿熱を取り除く

薬対：柴胡と往来寒熱を除き、芍薬と**下痢を止め**、桑白皮と肺火を泄し、山梔子と胸郭火熱を除き、荊芥防風と肌表の熱を清解する

苦寒で脾胃を損ないやすいの実熱以外には使用しない。



山梔子

基原) アカネ科のクチナシの成熟果実

性味) 苦、寒

帰経) 心、肺、肝、胃、**三焦**

葉能)

清熱瀉火、**除煩**→梔子豉湯、黃連解毒湯

清熱利湿→茵陳蒿湯、梔子柏皮湯

清熱涼血、止血→梔子金花丸、十灰散

清熱解毒→清上防風湯、柴胡清肝湯

山梔子は心肺三焦の熱を清解しながら緩徐に下行し、利小便し気分に入り、**除煩、清熱利湿**するとともに血分に入り涼血止血、解毒に働く。

縦隔にとどまった熱にも有効。



黄柏

基原) ミカン科のキハダの周皮を除いた樹皮

性味) 苦、寒

帰経) 腎、胆、膀胱

葉能)

清熱燥湿→梔子柏皮湯、二妙散、三妙散

清熱瀉火、瀉相火→知柏地黄丸、

清熱解毒→黄連解毒湯



黄柏は清熱燥湿作用をもつが、**腎経の相火を瀉し、かつ腎陰をそこなわない。**下焦の湿熱を清泄する作用に優れている。



黄芩は上焦を治し
黄連は中焦を治し
黄柏、大黄は下焦を治し
山梔子は三焦を治す

熱

黄連、大黄は脳の興奮を瀉す

大黄黄連瀉心湯

《傷寒論》

大黄6、黄連3

- 心下痞し、これを按じて濡、その脈関上浮のものは、大黄黄連瀉心湯これを主る。
- 心下に熱邪が結している。
- 有形の実邪がないので、圧すると軟らかく少陽の心下に熱結があるので脈は関上が浮である。
- 麻沸湯二升をもってこれを漬けること須臾、絞るかすを去り、分ち温め再服す。
瀉下の効果を期待せず、軽揚泄熱の意味を持たせている。熱湯に漬けてすぐに絞って服用する。（→瀉下を目的としていない。）
- 大黄黄連瀉心湯は心下痞という自覚症状はあるものの痞鞭はない。
随って病変は胃部というより心（脳、こころ）や縦隔の熱や胆道系の熱を瀉す処方だと思う。大黄も黄連も中枢に対する鎮静作用がある。



○61大黃黃連瀉心湯

図の如く、**心下痞、之れを按ぜば軟**

又、心下痞気不定の者

臍下より凡そ二寸下、ひそかを指を下して
腹脈の浮脈を考うるに

動に非ず、悸に非ずして、

指頭に自ら浮脈をおぼゆる者はなり

学ぶ者、謹んでこの脈を察して

もってこの指を定極することを知るべし

又いう、本文に心気不足というもの世に多し

俗にいう、

「よく物忘れして冒する者、甚だしきものは健忘」

と号する、是なり。

一書にいう、心下痞鞭、嘔吐吃逆、あるいは

噫（てい：くしゃみ）するもの此の方大いに効あり

精神の緊張のために腹部の拍動が強くなっているが自覚はない



●132大黄黄連瀉心湯

附子瀉心湯、三黄瀉心湯、黄連解毒湯

図の如く、心下痞して一物ある如く覚え

手をもってこれを按ずるうちに

散り失せて何もなく

濡（やわらか）にして

両傍にもまた二大竹を立つる如きものものもなく

只、なんとなく、心下の痞をおぼゆるものを

大黄黄連瀉心湯の証とす。

図の如く大便が下腹部に溜まって、脳に熱がこもり心気不定となる。

下腹部に便が溜まっているため、心下部はかえって軟であることがある

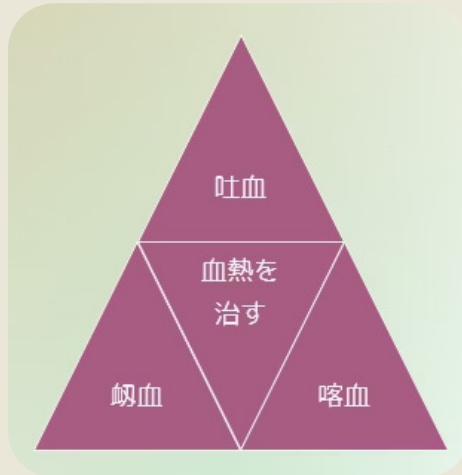
大黃々連瀉心湯圖



右治驗亦皆以心下之診得之者宜与図說併考

● 三黄瀉心湯

- 黄連、黄芩、大黄
- 血熱による出血を治す



連

黄芩

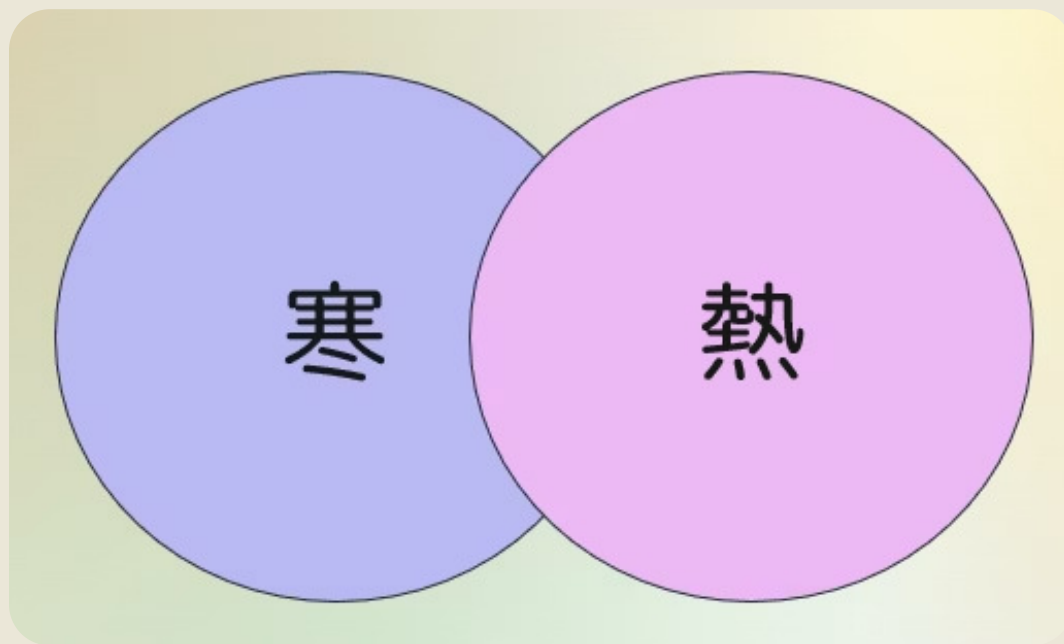
大黄

《金匱要略》

黄連、黄芩、大黄

- 心気不定、心下痞するものを治す
- 「三黄瀉心湯」は、体の熱や炎症を取り、病的に亢進した「心」のエネルギーを取り去ってイライラを鎮める「瀉剤」の代表的処方
- 高血圧にともなう肩こりや耳鳴りに用いる。
- 体力がある人で赤ら顔、のぼせ気味、精神不安、便秘があるという方に用いる。主に高血圧にともなうのぼせ、肩こり、耳鳴り、頭重、不眠、不安といった症状、あるいは出血（鼻血、痔出血）、更年期障害やいわゆる血の道症などに適応がある。

寒熱錯雜



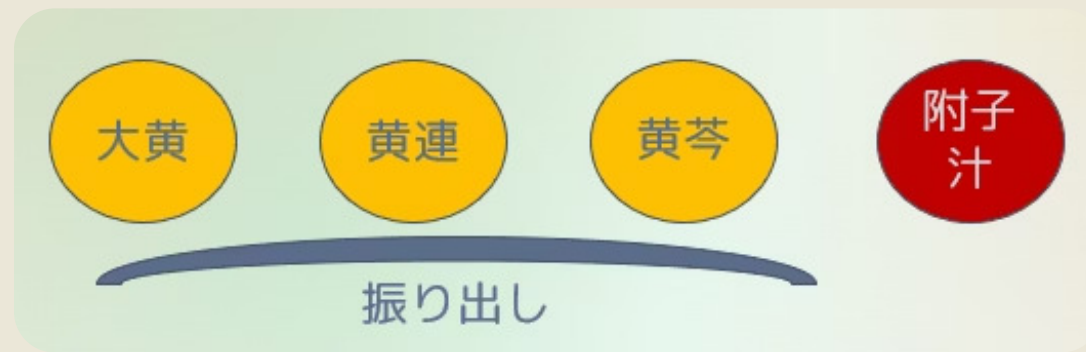
寒熱錯雜

● 附子瀉心湯

《傷寒論》

大黄6，黄連3，黄芩3，附子3

- 効能）泄熱開痞、扶陽固表
- 「心下痞し、復た悪寒し、**汗出づるもの**は、附子瀉心湯これを主る。」
- 熱邪が心下を痞結すると同時に、陽熱の達表も阻滞したために、衛陽が虚して悪寒、自汗を呈している。
- 悪寒、冷え、自汗 附子は脱汗を治す
- 大黄と附子は相性がよい。附子で腎を守り代謝を保つ



● 半夏瀉心湯

半夏（九分）、黄連（一分半）、黄芩、乾姜、
人參、大棗、甘草（各四分半）

目標は心下部の痞えと嘔気、腹鳴、下痢

自覚的な痞え感：心下痞
他覚的な抵抗：心下痞硬

《傷寒論》《金匱要略》

半夏9，黄芩6，乾姜6，人參6，炙甘草6，黄連3，大棗4

- ・ 効能）開結除痞、調和脾胃、寒熱併調
- ・ 主治）脾胃不和
- ・ 心下部が痞えて張る。悪心、嘔吐、腹鳴、下痢、舌苔が薄黄で膩など。



飲み過ぎた翌朝を考える

アルコールが、胃粘膜を荒らし、身体は熱をもつ身体はだるく、
むかつきがあり、食欲なく、便はゆるいか下痢

胃粘膜は熱を持ち炎症を起こしている

胃の熱を冷ます

黄連

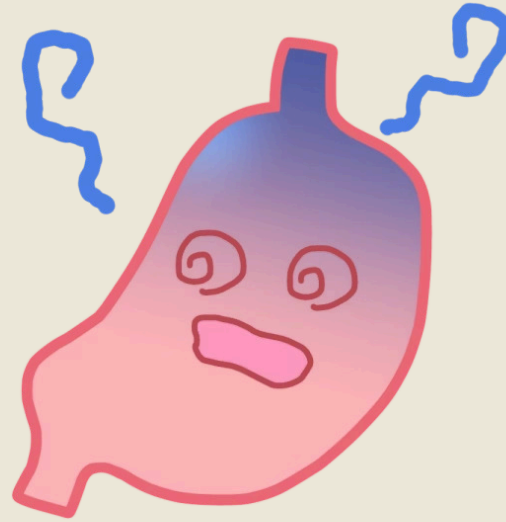
黄芩



素因に脾虚がある人

胃は冷やされて機能失調に陥る

甘草



乾姜

食欲なく、ぐったりして、何も食べられなくなる。軟便下痢をする。

甘草乾姜で脾胃を温め、脾胃の気を鼓舞する

胃は熱をもちやすく冷えに弱い器官

寒熱錯雑証が多い

辛開苦降甘調の名方半夏瀉心湯の誕生



○66半夏瀉心湯

図の如く、**心下痞鞭**、
或いは軟実にして雷鳴するもの此の方の証なり
余案ずるに、久しく**下痢止まず**腹痛する者この証多し、
或いは大便閉し、時々腹痛するものこの証まあり、
余が門、しばしば用いて効ある毎に之れを信ず
或いは心腹疼痛のもの、この証多し
又案ずるに、下痢して後
心下痞硬する者、この証といえども、雷鳴せざるものあり

鑑別

半夏瀉心湯はその雷鳴心下にあり
小柴胡湯は胸脇苦満あり
附子粳米湯はその雷鳴腹中にあり



半夏瀉心湯之圖

半夏瀉心湯の3つのラインアップ

1 半夏瀉心湯

心下部の痞え、嘔気嘔吐下痢、腹鳴

2 生姜瀉心湯

ひねショウガを加える 嘔気、酸っぱいものがあがってくる

3 甘草瀉心湯

甘草を増量する 急迫を治す 精神不穏、下痢の程度強い

● 生姜瀉心湯

《傷寒論》

半夏瀉心湯の乾姜を6gから3gに減じ、生姜12gを加える。

- 和胃消痞、散結除水
- 「傷寒汗出で解するの後、胃中和せず、心下痞硬し、**乾噦食臭し**、脇下に水気あり、腹中雷鳴下痢のものは、生姜瀉心湯これを主る。」
- 半夏瀉心湯証で嘔気の強いもの
- 裏寒には乾姜を鎮嘔には生姜を用いる

消化を助け、利水して嘔をとる

生姜瀉心湯は、前方の証にして胃中の不和を覚え**乾噦（おくび）**、**食臭**、雷鳴、下痢するものを治す

乾噦、食臭は、**食穀速やかに化せざる候なり**これ水気胃中に入りて、陽気を抑圧す

乾姜厥を温して結を解すの能ありといえども、かえって汅濫の水を去らず

生姜、よく胃口を開いて、汅濫の水を去り、胃腸をめぐる故に乾姜を減じて生姜を加う

● 甘草瀉心湯

《傷寒論》

半夏瀉心湯の人参を除き、炙甘草を12gにする

- 効能) 益気和胃、消痞止嘔
- 「傷寒中風、医反ってこれを下し、その人下痢、日に数十行、穀化せず、腹中雷鳴し、心下痞硬して満し、乾嘔し心煩し安んずるを得ず、医は心下痞を觀、病尽きずと謂い、復たこれを下し、その痞ますます甚だし、これ熱結するにあらず、ただ胃中虚するをもって、客气上逆す、故に硬くせしむるなり、甘草瀉心湯これを主る。」
- 感染症を医師が誤って下法を用いたところ、胃気が損なわれて消化不良、下痢が一日に数十回に及び、脾胃の機能が衰弱してしまったもの。甘草で急迫を治し、補脾をおこなっている。



○67甘草瀉心湯

図の如く、半夏瀉心湯の証にして

心煩し心気安からざる者

この方の証なり

余按ずるに此に心煩というもの

甘草の証なり

甘草は急迫を緩める能あり

且つ腹を診するに

心胸急迫して心煩するを知るべし

この心煩すること一ならず

或いは苦満して心煩する者は

柴胡の証を考うべし。

従って図の如く心下痞硬と同時に胸の痞えもある



食滯

食べ過ぎ

平胃散

《和剤局方》

蒼朮15，厚朴9，陳皮9，甘草4

- 効能）燥湿健脾、行気和胃
- 主治）湿困脾胃
- 腹満、胃の痞え、食べたくない、味がない、悪心、嘔吐、噯気吞酸、肢体が重だるい、眠くて横になっていた、泥状便～下痢傾向、舌苔は白膩で厚い。脈は緩。
- 食べ過ぎて腹が張って苦しい、便がやわらかい。

保和丸

《丹溪心法》

山楂子6、半夏3、茯苓3、神麴2、陳皮1、連翹1、萊服子1

- 効能) 消食化積、和胃理氣、燥湿健脾（そうしつけんぴ）
- 主治) 飲食の不節制、特に過食・油膩物の摂取による脾胃の停滞
脾虚湿困による運化失調と氣機不暢（氣滯）
- 保和丸は、「飲食所傷」による脾胃機能の失調＝脾虚・氣滯・湿困・食積を同時に整える方剤。
消食＋理氣＋燥湿健脾を同時に行うため過食により氣機と水湿が失調したときの調整薬」。
症状が「食べたくない」段階まで進んでいれば、六君子湯などの補氣薬ではなく、まず化積・和中薬から導入するのが順。

水滯

● 五苓散

《傷寒論》

桂枝6、朮9、茯苓9、沢瀉15、猪苓9

「本もって之れを下すが故に心下痞す。瀉心湯をあたうるも痞解せず、その人口渇して、口の中が乾いて、小便不利のもの、五苓散之れを主る。」

主治

蓄水証（外有表証、内停水湿）

風寒の邪が侵襲して頭痛、発熱、悪寒、脈浮の太陽表証を呈すると同時に、太陽膀胱の気化を阻害して水湿が内停して小便不利する。

水湿内停

脾虚で水湿の運化が停滞したために起こる

霍乱

夏に生冷物を暴飲暴食して脾胃を破り、湿邪が昇清降濁を失調させておこる上吐下瀉。

痰飲（臍下水気）

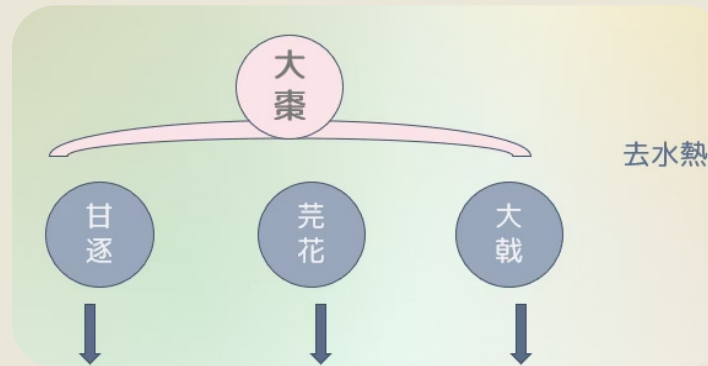
膀胱気化不足で水湿が内停し臍下に水飲があるため、動悸し、水飲が上逆すると水逆の嘔吐が、清陽が上昇されないためめまいが生じる

十棗湯

懸飲：脇下の水飲内停（胸膜炎、胸水）の処方

《傷寒論》

- 太陽の遊風、下痢嘔逆し、表解するものは、すなわち之れを攻むるべし、その人皃皃と汗出で、発作時にあり、頭痛み、心下痞硬して満し、脇下に引きて痛み、乾嘔し、短気し、汗出で悪寒せざるものは、これ表解し裏いまだに和せざるなり、十棗湯これを主る。



○十棗湯

胸や腹に抵抗があって引きつるように痛むもの

図の如く腹中に堅塊ありて
その状方長（細長く）にして
之れを按すもたゆまず、時々掣痛するものこの証の準拠とす。
かつ、堅塊の状、これを按すに、
例えば胸端より臍の辺まで長く、四、五寸の竹の太さを按ずるが如く、
或いは胸より腹に至り細長く引っ張り
或いは短くして脇下の傍に手に中る物あり
その大小長短によらず、只掣痛の二字を眼とすべし
掣は引なり、ビクビクと引痛むなり。
凡そ、痰飲ありて咳するもの、
或いは四肢、腰腹掣痛するもの、
その余それぞれの患いを問わず、
胸腹掣痛するの準拠を以てこの方を用いて神効あることを知るべし

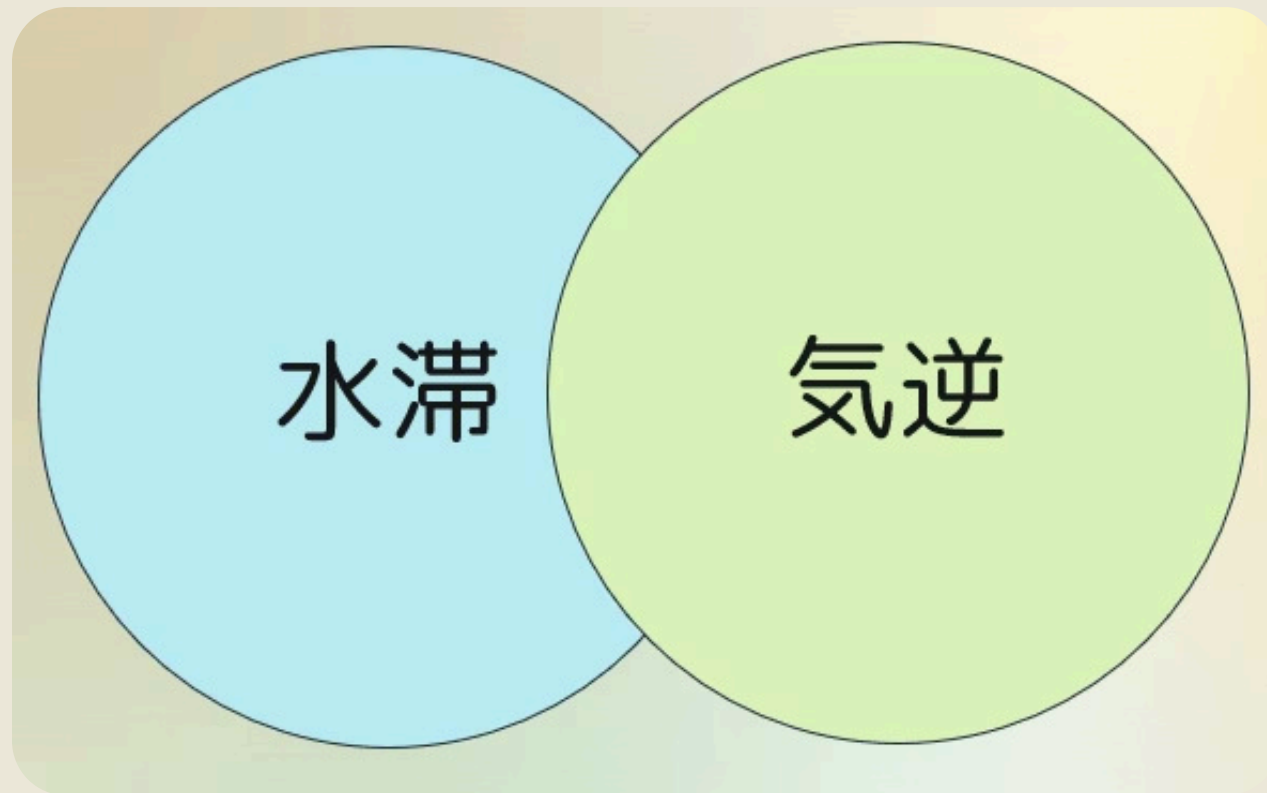


●十棗湯 膈の引きつり

図の如く心下痞硬して満、脇下に引きつり痛み
指頭にてこれを按すに、心下脇下の辺
わずかに触れば、びっくりして痛み
あるいは咳すれば脇腹ひきつり
或いは身を動かし手を挙げれば、
その拍子にきやりと痛み、
あるいは息にかかり痛むもの、皆かくのごとし。
また胸間心下に水飲かかりて、下らずにあるの
致す処なり、
故に懸飲と名づく
懸は宙にかかるなり

十棗湯圖





水滯と気逆（胃の運動異常）

胃の降濁作用が傷害されて胃液が逆流する病態 (胃の気逆証)

●茯苓飲

《金匱要略》

茯苓、人參、白朮、枳実、陳皮、生姜

- 「心胸中に停痰宿水あり、自ら水を吐出して後、心胸の間虚し、氣満ちて食すること能わざるを治し、穀氣を消し、よく食せしむ。」
- 効能：行気利水、健脾和胃
- 主治：胃内停水による嘔吐、痞え、上腹部の張り、食欲不振

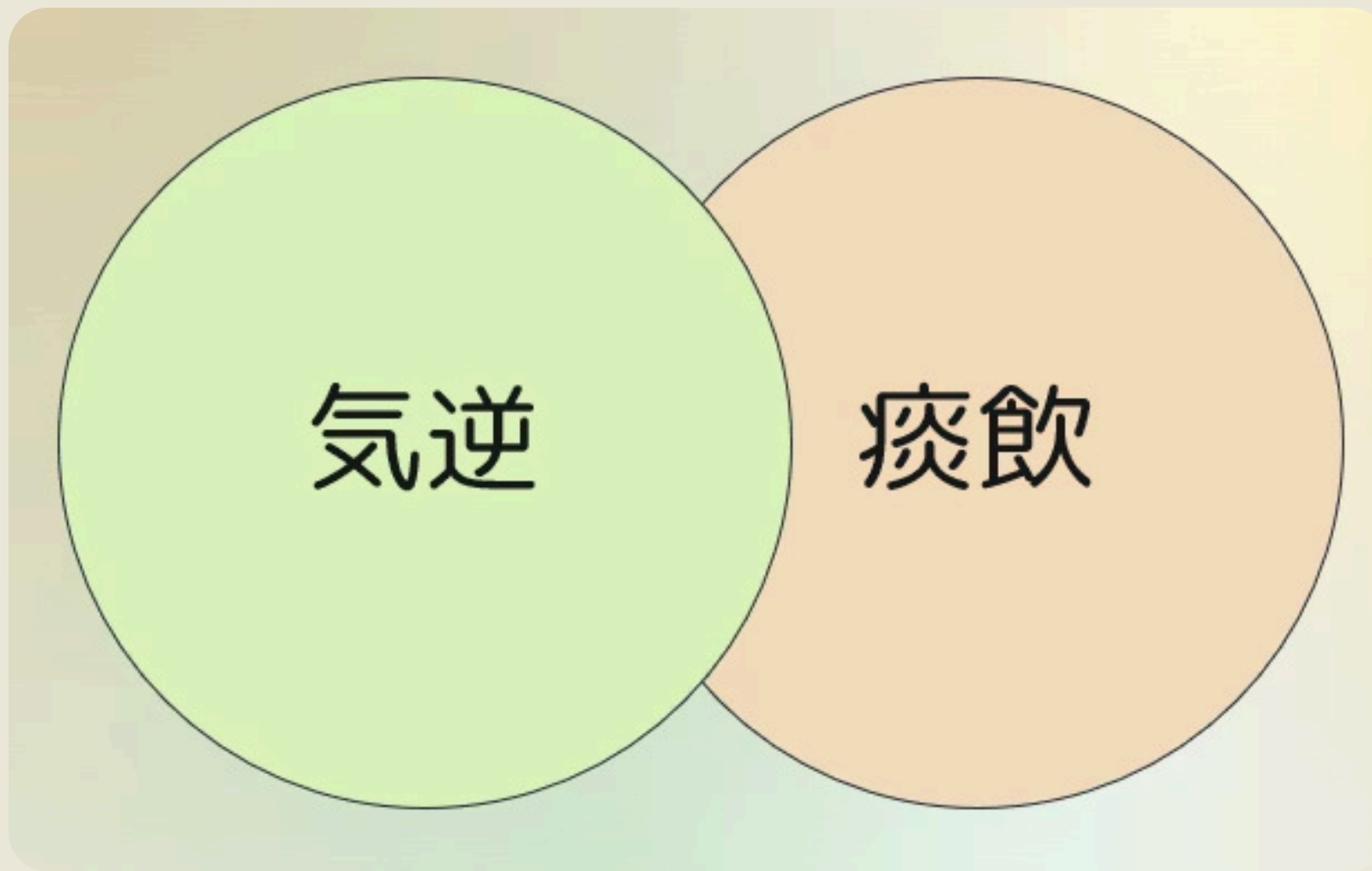
痰飲

●二陳湯

《和剤局方》

陳皮、半夏、茯苓、甘草

- 「痰飲患いを為し、或いは嘔吐悪心し、或いは頭眩心悸し、或いは中脘快ならず、或いは発して寒熱を為し、或いは生冷を食すに因り脾胃和せざるを治す。」
- 効能 燥湿化痰、理気和中
- 主治：湿痰
- 方意：燥湿化痰により、痰湿を除き、理気和中により脾を健運させて痰湿の発生を防止する。
- 食べ過ぎには山楂子、麦芽、神麴を加える。



旋覆花代赭石湯

《傷寒論》

旋覆花、人參、生姜、代赭石、甘草、半夏、大棗

「傷寒、汗を發し、もしくは吐し、もしくは下し、解して後、**心下痞硬**し、噫氣除かれざるものは、旋覆花代赭石湯これを主る。」 噫氣（あいき：ゲップ）

病機：胃氣虚と痰濁内阻により胃氣が和降できなくなり、上逆した状態

方意：胃虚を補い、痰濁を化して氣逆を下降させる。

旋覆花

基原）キク科オグルマの頭花

性味）苦、辛、鹹、微温

歸經）肺、大腸

葉能）消痰降氣平喘、降逆止噫

代赭石

基原）天然の赤鉄鉱ヘマタイト

性味）苦、寒

歸經）肝、心包

葉能）

平肝清熱 肝陽上亢の頭痛眩暈耳鳴

鎮逆降氣 痰濁による噯氣、嘔逆、嘔吐などの涼血止血

その他

以下に提示する処方方は心下痞、
心下痞硬と異なるが
心下に腹証が及ぶ症候として
参考のため提示する

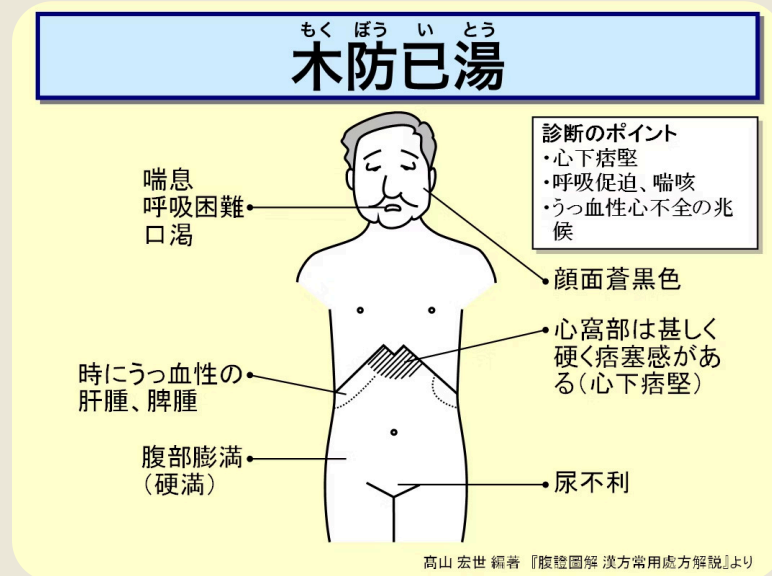
心下堅 木防已湯

木防已湯

《金匱要略》

木防已、石膏、桂枝、人參

- 「膈間支飲、その人喘満、心下痞堅、面色黧黒、その人脈沈緊、これを得て数十日、医之れを吐下して癒えざるは、木防已湯これを主る（金匱要略痰飲病編）」
- 効能：瀉熱逐飲
- 主治：支飲（飲停胸郭）
- 呼吸困難、胸部の膨満、上腹部が硬く痞える、顔色がどす黒い、全体が黄膩、脈が沈で有力。
- 病機：胸郭に水飲が停滞して肺胃を阻滯し、停飲化熱した状態。現在の肺水腫に相当する。



胸脇苦満が心下に及ぶ病態

結胸

熱邪と水飲・痰濁が胸脇心下で結し、硬く脹って痛む病証

強結胸散 ホノミ漢方

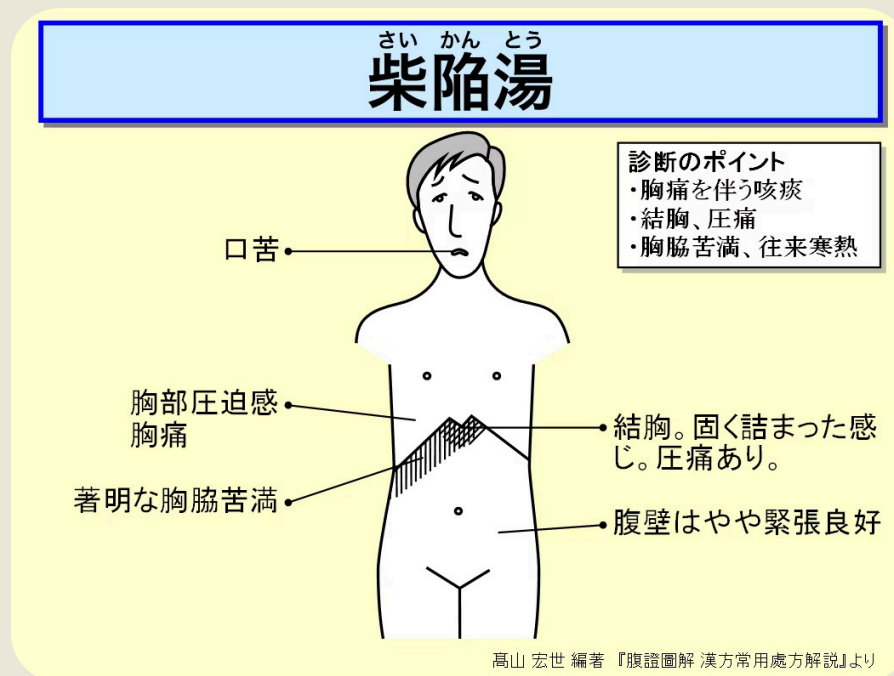
I 栝楼根、半夏、黄連、蒼朮、茯苓

- 「強結胸散」は、処方名を「小陷胸湯」といい、胸部の熱痰を改善する処方です。咳嗽・黄色で粘稠な痰で喀出しにくい、胸痛・胸苦しい・上腹部のつかえ・呼吸困難・口が苦いなどの症状で、発熱・悪心・嘔吐・便秘などを伴う方に用いられます。
- 効果・効能
胃酸過多症，熱病による胸痛，乾性胸膜炎，気管支炎，肋間神経痛

●柴陷湯

柴胡、黄芩、人参、半夏、甘草、生姜、大棗、黄連、栝楼仁

- 本朝經驗方とされるが柴陷湯の原型は朱肱『傷寒活人書』（1107年）にまで遡及しうる。
 - 気管支炎、胸膜炎に伴う、胸痛、咳、
 - 柴陷湯は誤って下剤を用いた後、邪気が気虚に乗じて心下に聚まり、胸中の熱がさらに心下の水と結合するものを治す。この症でさらに重症の者は大陷胸湯の適応であるが、大抵の場合は柴陷湯で防げる。またジフテリアの初発時に竹茹を加えて用いるし、その他、痰咳の胸痛に運用する。
- 浅田宗伯『医方口訣集』第八条



栝蒌実（果実全体）

- 栝蒌皮は「清肺化痰，寛胸利気」、栝蒌仁は「潤腸通便」、栝蒌根は「清熱生津、消膿排腫」の効能があるとされており、それぞれ異なっている。
- 栝蒌実は無熟または完熟のものを使うが、効能は栝蒌皮と同じである。
- 小陷胸湯や栝蒌薤白白酒湯に用いるのは果実全体の栝蒌実である。



経方理論の括蕤実（栝楼仁）

1 清熱化痰

2 寛胸降濁

3 消腫散結

4 潤腸通便

- 作用する場所は、肺、胸、膈、心下、心包、小腸を主として全身に作用する。
- 胸中の熱痰を飲にまで溶かし、その飲を半夏で湿にまで溶かし、生体の側が処理しやすくする
- 心下に固まっている痰を溶かすイメージ

結瓜蒂散 胸中痞硬

《傷寒論》

瓜蒂、赤小豆、淡豆鼓

- 病桂枝證のごとく、頭痛まず、項強ばらず、寸脉微かに浮、**胸中痞鞭**し、氣上って咽喉を衝き、息を得ざるものは、此胸に寒あるなり、当にこれを吐かしむべし、瓜蒂散によろし。」
- 効能：涌吐痰涎宿食
- 主治：痰涎宿食、壅滯胸脘
- 胸苦しい、胸がつまる、咽がつまって息ができない、上腹部が痞えて苦しい、嘔気
- 苦味で涌吐に働く瓜蒂が主薬、ただし苦寒の瓜蒂は胃気を損傷するので赤小豆、淡豆鼓の穀気により胃を保護する。

塩湯探吐法

食塩

- 食塩を湯に溶いて飽和させ、一回2リットルを飲ませ、羽毛や指で咽を刺激して吐かせる。
- 効能：涌吐宿食
- 主治：宿食停滯、乾霍乱、誤食毒物

痞、満、燥、実に大承気湯

承気とは、熱結を瀉下して胃気を下降させ、閉塞を通暢する意味

大承気湯

- 得病二三日、脉弱、無太陽柴胡證、煩躁、**心下痞**、至四五日、雖能食、以承気湯、少少與微和之、令小安、至六日、與承気湯一升、若不大便六七日、小便少者、雖不大便、但初頭鞭、後必溏、此未定成鞭也、攻之必溏、須小便利、屎定鞭、乃可攻之、宜大承気湯。
- 効能：峻下熱結
- 主治：熱結腸胃（陽明病腑実証）
- 発熱、悪熱、日晡所潮熱、意識障害、うわごと、汗が出る、口渇、尿が濃く少ない、便秘或いは悪臭のある水様性下痢、腹満、腹痛、圧痛が強く触れさせない、舌苔は黄厚で乾燥して甚だしいと焦黒色や芒刺を呈する。脈は沈実あるいは沈遅で有力。手足の冷え、ひきつり、狂騒状態がみられることもある。

痞、満、燥、実

- この方は上中下三焦に痞満燥実すべて満ちるをまち、初めて之れを使用すべし
- 痞は胸腹部の痞塞重圧感、腹部が硬いこと
- 満は膨満感、抵抗
- 燥は腸内の硬い糞塊、便秘、舌苔の乾燥
- 実とは腸内の有形の邪により、腹部が硬く圧痛があること。
- 痞には消痞破結の枳実が、満には除満行気の厚朴が、燥には潤燥軟堅の芒硝が、実には攻下除実の大黄がそれぞれ対応している。
- 攻下熱邪の方剤によって燥屎を除いてはじめて熱邪が消滅するので、釜底抽薪（釜の底から薪をひきぬく）治法と呼ぶ。

まとめ

- 心下の痞えという自覚症状は漠然とした訴えで、腹腔神経叢が関与する様々な臓腑の反応の結果生じる。
- 他覚所見としての心下痞硬は、痞えがより強くなったときに内臓体癖反射として現れる所見でもある。
- また、心下は心理的なストレスがかかった時に、情動が神経を通して心下痞や心下痞硬という形になってあらわれる場所でもある。
- 心下痞、心下痞硬を考えるときは、寒熱を中心に、水滯、痰飲気滯などを念頭に置いて弁証する。
- 臓腑の中でも直接心下にあるのは胃腸であり、中でも寒熱錯雑と弁証される半夏瀉心湯をはじめとする瀉心湯類は胃熱と精神から来る熱ならびに裏寒にも対応する名方である。
- 最後に心下という場所にまつわる腹診所見と方剤についても紹介した。